

私たち生活クラブ生活協同組合（千葉）は「原子力利用に関する基本的考え方」の改定に断固反対します。「エネルギー供給における自己決定力の確保」とし、エネルギー安全保障の観点から原発を推進することを正当化しています。しかし、日本は原発で使用するウラン燃料を輸入に頼っており、ウランを取り巻く国際的な情勢から無縁ではありません。核施設は武力攻撃のターゲットにもなりえます。エネルギー安全保障上も原発はやめるべきです。原発は、事故やトラブルが頻発に生じており、不安定な電源でもあります。ひとたび事故やトラブルが生じればその影響は広範囲に及びます。原発は電力の安定供給上も問題があります。「安全神話」から決別し、「東電福島第一原発事故の反省と教訓を真摯に学ぶ」とするのであれば、脱原発こそ目指すべきです。ALPS 処理水などに関しては科学的に根拠のある情報発信を行っていくべきとしていますが、現在、国は「科学的な情報発信」と称して、巨額の予算を費やして処理水の海洋放出のために宣伝活動を行っています。トリチウム以外の放射性核種が、現在タンクの中にどのくらい残留しているのかなど基本的な情報については明らかにされていません。科学的な情報発信をいうのであれば、まずはそうした情報開示を行うべきです。昨年10月に第6次エネルギー基本計画が閣議決定され2030年、2050年にむけた国のエネルギー政策を決定しています。原子力発電所の新增設やリプレース（建て替え）などは計画に入っていません。「使用済み核燃料」の処理は破綻しており今後の見通しもなく、17基の原子力発電所を再稼働すると途端に「使用済み核燃料」の置き場がなくなります。

また、気温の上昇を一定の量に抑えるためには排出できる二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）の量に限りがあり、産業革命の気温上昇を1.5°Cに抑えるなら、2050年の排出量ゼロだけでなく、2030年までに大幅に減らさなければなりません。原発の新增設は計画から運転開始まで10年以上かかることから、2030年までの大幅なCO<sub>2</sub>削減には貢献しません。今回の場当たりのな原発推進の方針転換は危険を伴い、本質的な電力需給逼迫の解決にはなりません。2030年までにCO<sub>2</sub>の大幅削減を進めるためには、計画から運転開始までの期間が短い再生可能エネルギーの拡大とエネルギー利用の効率化をすすめるべきです。

（原子力委員会宛 ※提出のフォーマットが他のパブコメと異なり、文字数に制限があったため、体裁を変えました。）